

称号及び氏名	博士（人間科学）池内 早紀子
学位授与の日付	令和7年3月31日
論文名	道教より影響せる鍼灸治療に就きての日本医学思想史研究 —「虫」の表象を通じて—
論文審査委員	主査 山東 功 副査 西田 正宏 副査 池平 紀子 副査 大形 徹

博士論文要旨

本論は、道教より影響をうけた日本鍼灸治療に関する医学思想史を、「虫」の表象を通じて論じたものである。

2024年現在、堺市百舌鳥八幡駅のホームから「小児虫はり」と書かれた看板が見える。これは鍼灸院が小児鍼を施術するという看板である。「小児虫はり」は、いまでも関西を中心におこなわれる小児に対する鍼灸治療の一種である。小児の「疳の虫」が治療の適応症状であるため、「虫はり」と呼ばれる。「疳の虫」は、夜泣き、キーキーとした声をあげるなどといった乳幼児の症状をいうが、かつて「疳」の「虫」が病を引き起こすと信じられていたことによる。岐阜県のある寺院に残された過去帳(1771-1970年)に、乳幼児・小児の死因において、「虫」に関連する病が、80%を超える(672/828人)という記録がある。「虫」は、病の重要な原因の一つであった。また、『灸法』室町頃、茨木二介元行『針聞書』1568年(今新流)、著者不詳『針治諸虫論図』1616年写本(吉田流か)、『吉田虫之書』・吉田意休『虫書』成書年未詳(吉田流)といった中近世の鍼灸流儀書には、病をもたらす「虫」の図が描かれている。この「虫」は、見ることのできない想像上の生物であることが多い。今も「虫の居所が悪い」、「腹の虫が鳴く」などと言う。その「虫」と同様に実在しない「虫」である。

ところで、「疳の虫」と関係が深い「伝屍虫」に関する武田時昌の「腹の虫から結核菌へ—伝屍の古病理学」という記事がある。ここでは、武田は日本人の疾病観の一つである「腹の虫」は、道教の「三尸」の概念より生じた「虫」に由来すると考えている。すなわち、これが鍼灸流儀書に描かれる「虫」であり、現在行われる「虫はり」へとつ

ながっているのである。言い換えれば、鍼灸流儀書の「虫」は道教の影響をうけて創出されたものであり、日本中近世の鍼灸治療には、明らかに道教の影響がみられるのである。

本論は、「虫」という病因の概念は如何にして成立したのか。鍼灸流儀書が、なぜ「虫」を描くに至ったのか。また道教は鍼灸治療にどのように影響を与えたのかを考察した。

第一章 鍼灸治療略史では、中国・朝鮮・日本の鍼灸治療の歴史を論じた。まず第一節 中国鍼灸治療史の、1. 鍼灸治療の起源では、体内に侵入し病をもたらす「虫」・「鬼」・「邪物」を取り除くために、「灸」「砭」が「薬」あるいは「言葉」（呪文）と共に用いられたこと、「鍼」はまだ用いられず、孔穴の概念もなかったことを述べた。2. 気系の医学・『黄帝内経』の成立では、鍼法は、灸法の理論的、技術的な基礎のうえに、砭法の技術を導入し、艾による熱的な効果を鍼による物理的な効果に置き換えることによって成立したこと。鍼法が、孔穴の概念と体系を作り出したこと。この鍼法を開発した学派の一つである黄帝学派により『黄帝内経』などの「黄帝医籍」が編まれ、これが中国医学の基礎となったこと。これは、『春秋左氏伝』などにみられる、身体の内部の「気」の変化を重要視する「気」系の病因論に基づくということを示した。3. 三国～六朝～隋唐の鍼灸からは、我が国に齎されることになる医書を中心に論じた。『隋書』経籍志や『新唐書』芸文志には、多くの医書名が著録されていること、その中には道教に関わる陶弘景、葛洪、孫思邈などの著書が含まれている事を述べた。4. 宋・元の鍼灸では、国家による医療政策が推進されたこと、医学の標準化が図られ、医書の改訂が行われたこと、医学書が刊行されるようになったことを述べた。多種多量の印刷された医書の存在は、医学知識の普及をもたらし、我が国にも速やかにこれらの医書が到来し影響を与えた。5. 明・清の鍼灸では、この時代の医書が先の時代を継承し発展させたものであったこと、実用性をもつものとなってきたことを述べた。これらにより明代に至るまでの鍼灸や医書には道教との関連が深いものが数々あることを示した。第二節 日本鍼灸治療史では、鍼灸の伝来から近世の鍼灸諸流派に至るまでの流れを概観した。1. 鍼灸の伝来では、最初、医学は朝鮮半島を通じ仏教文化とともにもたらされたこと。遣隋使・遣唐使により中国より直接齎されるようになったことを述べた。2. 『医心方』の成立では、『日本国見在書目録』には「医方家（医鍼・合薬・仙方）」が1309巻も有ったこと、これらを大量に引用して『医心方』が編まれたことを述べた。『医心方』には医経・薬方・鍼灸や神仙家、道士、仏僧に関連する書が混在していること。巻1の総論に続き巻2に鍼灸篇が充てられているのは鍼灸治療が優位だったという指摘があることを述べた。3. 中世日本の鍼灸治療と医書では、平安時代末期から安土桃山時代の日本で編まれた鍼灸関連書、『続添要穴集』・『頓医抄』・『万安方』・『伝屍病廿五方』・『福田方』・その他を解説し、中国医書の伝入のみならず、日本独自の医書が編まれたこと、それらは灸法による治療がほとんどであったことを論じた。4. 近世日本における鍼灸

諸流派と鍼灸治療では、仏教系医学や道教に影響を受け、鍼治療を中心とした諸流派が興りはじめたこと、日本独特ともいえる鍼灸術が発展したことを論じた。第三節 朝鮮鍼灸治療史では、『東医宝鑑』・『神仙太乙紫金丹方』・『衛生方』・『頓生録』・『二養編』・『寿美叢書類輯』・『降気要訣』など道教色の強い医書が編まれたこと。秀吉による文禄・慶長の役（1592-1598）により日本に持ち帰られた大量の医書や人材が日本の医学、鍼灸治療に影響を与えたこと。江戸期にも、度々『東医宝鑑』を請求したことなどを述べ、道教色の強い朝鮮医書が日本に齎されたことを論じた。

第二章 道教と医療では、道教と医療は双輪のような係わりが有ることを論じた。第一節 初期道教と治病では、まず「道教」の定義を確認し、初期道教集団である太平道・五斗米道が「疫病治療の宗教」でもあったことを論じた。第二節『太平経』の治病では、初期の道教経典『太平経』の内容は信仰治療に関わることが含まれること。鍼灸の記述もあること。「承負」などの「宗教的病因論」に基づくことを論じた。第三節「三虫」から「三尸」へ：「三尸神」の概念の形成では、寄生虫の「三虫」が、「古代人の「魂魄」観および鬼神観」と結びつき「三尸」になり、「倫理的意味」が付加されて、「宗教的病因論」に基づく「三尸」の概念が形成されたことを論じた。第四節『急救仙方』に記載される伝屍癆瘵の「虫」とその表象では、まず『急救仙方』の概略を確認し、道蔵本にのみ見られる伝屍癆瘵の「虫」を検討し、六代に変化する伝屍癆瘵の「虫」図を記載する書を比較考察した。元・『仁存孫氏治病活法秘方』が最も古い傳尸虫の図で、これが鎌倉・『万安方』に引用されたことを述べた。

第三章 中世から近世にかけて変化する日本鍼灸治療では、中世から近世にかけて変化した医療について病因論を中心に考察した。平安期では「鬼」（物の気など）による病とされ加持・薬物で治療されていた例が多く見られるが、民間医の出現する室町期になると「虫」による病に取って代わられたこと。灸に加え鍼による疾病治療が出現したことを論じた。第二節 鬼から虫へでは『耆婆五臟経』と『五輪碎并病形』を取り上げ仏教医学の解剖・生理観に、道教の病理観・身体観を取り込み、「三尸」（三尸虫）を介在させることにより、「腹の虫」の疾病観・「虫」系の病因論を形成していく過程を明らかにした。

第四章 道教が影響した中近世の日本鍼灸では、「虫」を図示し流儀書とした吉田流儀書の成書経過を辿ることにより、「虫」の表象を通じて鍼灸と道教との係わりを明らかにした。さらに呼吸法を治病の方法とした近世・江戸中期の鍼灸流儀書『平常流機道問答』を通じて、「虫」とは異なる形の道教の影響を考察した。

これらによって、日本の中近世の鍼灸治療が道教とどのように関わったかを明らかにした。吉田流儀書に至るまでの「虫」を図示する鍼灸書は、道・仏が習合した庚申信仰などを通して道教の影響を受けていた。『平常流機道問答』は、福井文雅は「道教はヴェトナムや韓国には伝わったが、宗教として日本に伝来することは無かった」という

が、むしろだからこそ江戸期には道教に対する興味と一種の憧憬がおこり、それを取り入れたのではないかと考えられた。

初出一覧

- ①第二章第三節：池内早紀子「「三虫」から「三尸」へ：「三尸神」の概念の形成」報告書『東アジア漢字文化圏の疾病・疫病観の史的・現代的展開—鬼系病因論の起源と思想的水脈』、投稿中。
- ②第二章第四節：池内早紀子『『正統道蔵』所収『急救仙方』に記載される「腹の虫」、大形徹ほか 編『東アジア伝統医療文化の多角的考察』臨川書店、2024、pp.42-65。
- ③第三章第一節：池内早紀子「鬼・鬼氣 (mononoke)・蟲：變化的日本病因論」『病魔：東亞視域下的醫療與鬼邪國際研討會予稿集』、台湾、中央研究院、2023。「鬼・鬼氣 (mononoke)・蟲：變化的日本病因論」、『魅、鬼、疾』、時報文化出版、校正中。
- ④第三章第二節：『第二届写本医学文献研究国際學術研討会』予稿集、上海中醫藥大學、2024。
- ⑤同上：池内早紀子「『五輪碎并病形』にみる醫學思想史の一斷面」『東方宗教』(142)、日本道教學會、2023、pp.44-63。
- ⑥第四章第一節：池内早紀子、大形徹「針灸吉田流『虫書』的成書過程--從図示的「虫 (mushi)」図的比較入手」、『從中古到近代：写本與跨文化研究 國際學術討論會 會議論文集』、北京大學、2019。『從中古到近代：寫本與跨文化研究』、中西書局出版、2025年1月刊行予定、(2024/11/12 二校)。
- ⑦第四章第二節：池内早紀子「『平常流機道問答』について (一)」『人文学論集』39、大阪府立大學人文学會、2021、pp.51-87。

学位論文審査結果の要旨

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間社会学専攻人間科学分野の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論は、道教より影響を受けた日本鍼灸治療に関する医学思想史について、「虫」の表象を通じて論じたものである。その内容は、道教が鍼灸治療に対してどのような影響を与えたのかという問題に焦点化されている。

2) 論文の方法論が明確である。

本論は、鍼灸関連書の分析を基に、「虫」の表象をめぐる日本医学思想史的考察を行ったもので、道教と医療との関わりについての浩瀚な議論が展開されており、研究方法論としての適切さを明確に示している。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本論では、中・近世成立の鍼灸流儀書を検討した上で、日本において「虫」という病因の概念が如何にして成立したのかという点を明らかにしており、日本医学史における先行研究の精査と思想史的検討との結果が、十分に関連付けられている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論では、これまで余り顧みられることの無かった鍼灸書『耆婆五臟経』・『五輪碎并病形』・『平常流機道問答』に対する精緻な読解と批判的考察がなされている。特に『五輪碎并病形』についての考察では、『桃山時代解剖之図』・『吉田虫之書』・『太上除三尸九虫保生経』といった他の医書との関連をもとに、緻密な実証と十分な検討がなされている。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

本論では、「虫」を図示した流儀書である吉田流流儀書の成書経過を取り上げることにより、日本における道教の影響に対して新たな知見が示されている。また、本論の第三章第二節は『五輪碎并病形』にみる医学思想史の一断面（2023年）がもととなり、これは、学術雑誌『東方宗教』（日本道教学會）掲載の査読有論文（142号）として、発表段階より道教研究の分野において高く評価されており、その所論は今後、先導的な位置を占めるものと思量される。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論では、中近世の鍼灸治療において、仏教医学の解剖・生理観に道教の病理観・身体観が取り込まれ、「三尸」(三尸虫)を介在させることにより「腹の虫」の疾病観と「虫」系の病因論が形成されたとする点を、鍼灸関連書の具体的な分析をもとに議論を進め、その展開について実証をしている。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本論は、これまでの道教研究に見られた、道教が宗教として日本に伝来することは無かったという議論に対して、近世において道教に対する興味と一種の憧憬が生じ、結果として、「虫」を図示する鍼灸書が成立したとする観点を示し、その過程について実証した点が、極めて独創的である。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員一致の結果、本論文を博士(人間科学)の学位に値するものと判断した。

学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 池内早紀子
学位論文題目 道教より影響せる鍼灸治療に就きての日本医学思想史研究
—「虫」の表象を通じて—

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間社会学専攻人間科学分野の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論は、道教より影響をうけた日本鍼灸治療に関する医学思想史について、「虫」の表象を通じて論じたものである。その内容は、道教が鍼灸治療に対してどのような影響を与えたのかという問題に焦点化されている。

2) 論文の方法論が明確である。

本論は、鍼灸関連書の分析を基に、「虫」の表象をめぐる日本医学思想史的考察を行ったもので、道教と医療との関わりについての浩瀚な議論が展開されており、研究方法論としての適切さを明確に示している。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本論では、中・近世成立の鍼灸流儀書を検討した上で、日本において「虫」という病因の概念が如何にして成立したのかという点を明らかにしており、日本医学史における先行研究の精査と思想的検討との結果が、十分に関連付けられている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論では、これまで余り顧みられることの無かった鍼灸書『耆婆五臟経』・『五輪碎并病形』・『平常流機道問答』に対する精緻な読解と批判的考察がなされている。特に『五輪碎并病形』についての考察では、『桃山時代解剖之図』・『吉田虫之書』・『太上除三尸九虫保生経』といった他の医書との関連をもとに、緻密な実証と十分な検討がなされている。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

本論では、「虫」を図示した流儀書である吉田流流儀書の成書経過を取り上げることにより、日本における道教の影響に対して新たな知見が示されている。また、本論の第三章第二節は『五輪碎并病形』にみる醫學思想史の一断面（2023年）がもととなっており、これは、学術雑誌『東方宗教』（日本道教學會）掲載の査読有論文（142号）として、発表段階より道教研究の分野において高く評価されており、その所論は今後、先導的な位置を占めるものと思量される。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論では、中近世の鍼灸治療において、仏教医学の解剖・生理観に道教の病理観・身体観が取り込まれ、「三尸」（三尸虫）を介在させることにより「腹の虫」の疾病観と「虫」系の病因論が形成されたとする点を、鍼灸関連書の具体的な分析をもとに議論を進め、その展開について実証をしている。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本論は、これまでの道教研究に見られた、道教が宗教として日本に伝来することは無かったという議論に対して、近世において道教に対する興味と一種の憧憬が生じ、結果として、「虫」を図示する鍼灸書が成立したとする観点を示し、その過程について実証した点が、極めて独創的である。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員一致の結果、本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断した。

戦略について検討している。また、メタ認知知識の構成に資する学習経験を促すための学習支援として、擬似理解状態への気づきを促すプレゼン設計課題と知的学習支援システムについて論じている。学習経験に基づいてメタ認知知識構成を促す学習支援としてメタ学習プログラムを論じている。教育・学習科学、学習支援システムへの学術的貢献について論じている。

本論文には、査読付きの学術雑誌に掲載されている論文が2編、国際会議に採録されて

いる論文が3編ある。したがって、現代システム科学専攻の博士論文申請要件を充足していることが確認された。

以下、人間社会システム科学研究科 現代システム科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 博士学位申請者が主体的に取り組んだ研究であること。

本研究は、博士学位申請者が学域4年次に研究テーマとして設定したもので、以来、入念な調査に基づいた研究計画を策定し、提案手法の設計、評価実験、論文執筆などに申請者が主体的に取り組んだ研究であると認められる。

2) 研究内容に新規性および独創性を有していること。

本研究は学習者が自身の学習経験からメタ認知知識を構成するメタ学習の支援方法について、これまでになかった教育アプローチのモデリングを提案している点が新規である。具体的には、Yモデルを用いて学習目標、教材、学習者像、教授戦略を設計し、学習課題や支援方法を具体化している。また、セマンティックスアウェアな教材や目標化ギャップ指摘などの具体的な支援技術を開発し、実践を通して効果を検証している。高次認知スキルの学習支援を対象とし、知的学習支援システムが備えるべき教材のあり方や課題設計について、従来のシステム設計との違いを明確化するための概念的道具立てを提供している点において独創性があると認められる。

3) 当該研究分野の発展に貢献する学術的価値が認められること。

教育工学分野において、学習経験に基づくメタ学習スキル育成という、これまで課題化されていなかった分野への社会実装が今後期待される研究である。高次認知スキル支援を対象とした教材のあり方や課題設計に関する概念的道具立ても提供されており、研究分野発展の基礎となりうる。特に、従来の学習支援システムでは困難であった、「正解が一つではなく書かれていないことを読み取る活動」を支援する新たなアプローチが提示されていることが今後の発展を大いに期待される。

4) 論文の構成及び内容が適切であり、論文としての体裁が整っていること。

本論文は、メタ学習の意義と支援方法について、体系的な支援モデルを構築するために、明確な章構成で展開されている。第1章で研究背景、リサーチクエスチョン、研究目的を明示し、第2章でメタ学習に関連する概念と理論を整理し、理論的基盤を提示している。第3章ではYモデルを導入し、学習目標、教材、学習者像、教授戦略を体系的にモデリングしたことが述べられている。第4章、5章で具体的な学習支援が提示されている。第6章で学術的貢献を考察し、第7章で結論と今後の展望が示されている。各章はメタ学習の各側面を明らかにしつつ、リサーチクエスチョンに答えるための理論的・実践的基盤を提供しており、論文としての構成と内容が適切である。

5) 学位論文の公聴会での論文内容の発表および質疑応答が論理的に明確に行われている

こと.

公聴会では約1時間で論文内容について発表があり, 学習経験を通してメタ認知知識を獲得する理論的枠組みとモデリング方法が明確に示されていた. 発表資料の作成も適切であり, プレゼンテーション能力にも問題がないことを確認した. 副査やその他の聴講者からの質問に対しても, 的確に応答がなされていた.